業平朝臣廟（なりひらあそんのべう）　〔吉田（よしだ）の奥にありとぞ、今詳ならず〕

〔暁筆記云、かの中将業平（なりひら）朝臣元慶四年五月九日病を発し、同廿八日子の刻生年五十六歳、北面にして身まかりたまへり。滋春遺詞にまかせ、東山吉田（ひがしやまよしだ）の奥にをくり納て廟をつくり、天暦元年七月十一日左少辨清原光任（きよはらみつとふ）に仰て、中将の霊を神と崇め給へり〕

二本松（にほんまつ）　〔吉田（よしだ）村の外西北一町許にあり。いにしへ春日の末社あり〕

一本松　〔二本松の南路の傍にあり。初此所に地蔵堂ありしなり〕

身隠森（みかくしのもり）　〔吉田（よしだ）の乾にあり、後（ご）三条院（でうゐん）の火葬所ならんか〕

法性寺（ほつしやうじ）　〔鴨川（かもがは）の東岸、今出川橋（いまでがはばし）の南にあり。法華宗。開基は阿闍梨朗慶（らうけい）なり。初は相州鎌倉（さうしうかまくら）にあり、本圀寺（ほんこくじ）と共に京師（けいし）にうつる。其ときは洛下壬生（みぶ）にあり、其後京極（きやうごく）今出川にうつり、元禄年中炎上にて此地にうつる。当寺の鐘に算盤秤、天秤等鋳形の模様あり、諸人見て奇異とす〕

正栄寺〔法性寺の北に隣る。浄土宗、開基唱誉上人〕

常林寺〔正栄寺の北に隣る、浄土宗なり〕

長徳院〔常林寺の北に隣る。浄土宗、開基観誉上人〕

地蔵堂〔今出川橋東爪にあり。地蔵尊の二躯を安置す、唐仏なり〕

武蔵寺〔糺の東、一乗寺道の左にあり。法華宗。当寺は江州浅井の家臣武藤内蔵丞国泰といふものあつて、讒言により生害に及ぶ。其妻尼となり、宅を転じて寺となし、亡夫の追福を修し、則夫の実名を取て国泰寺と号す。其後秀吉公薨去ある時、法号を国泰院と号す、故に寺号を改て、かの名字を摘んで武蔵寺と号すとなん。俗説に。武蔵坊辨慶叡山を出て此所に住すといふは大なる謬也〕

青龍寺〔田中村にあり、天台宗坂本西教寺に属す。本尊は地蔵尊、小野篁の作、腹帯地蔵といふ。中興は山門恵空和尚、当時は女僧住職す〕

沸々〔百万遍西門の前畠の字なり。初めは此地沼にして地中より水涌出て、其音常に沸々といひし故、土人字とするなり〕

地蔵堂〔同所西門の外、南向にあり。本尊延命地蔵尊、春日の作、立像五尺許。脇士、左、不動、右、毘沙門、共に上と同作。初は京師水落西光寺にあり〕

後二条院陵〔百万遍の東二町許、路傍の北にあり。帝陵記曰、後二条帝陵、山城国愛宕郡北白川村畑中にあり、字を福塚といふ。雍州府志曰、勧修家の一代五条大納言国綱卿の墳なる歟、国綱卿は元富有の人なり、五条内裏を造る。又治承四年平相国清盛公の勧めによつて都を摂州福原に遷し給ふ、其時国綱に里内裏を造らしむ、かるがゆへに双なき大福長者なりと、平家物語にも見へければ、世人福塚と称する物ならんか。山州名跡志曰、中頃陵の巡凹にしてつねに水あり、仍て泓塚といふ。後埋んで平なり、是より泓を改めて福塚といへり。むかりより此塚には霊神ありとて恐れをなす、三十年前近隣吉田村に住ものあり、元はある武家の士浪人となり、殺生を好みて生質太猛勇なり。毎歳此塚のうへに葫■生て、これを好ものあれどもおそれて采ことを得ず。かの者われ采べしとて、塚のうへに登るに、小蛇ありて首を延て白眼勢あり、強気覚へずして戦慄て家に帰り、惆悵して忽死すといふ〕

二躯石仏（にくのせきぶつ）〔陵の東、白河道（しらかはみち）の左傍にあり、二躰共坐像四尺許、甚古作にして希代の大仏なり。合運図云、宝徳三年三月、北白川の仏像動くといふは此像ならんか。伝云、秀吉（ひでよし）公の御時聚楽城に移しければ、此像夜々声を発して、白河（しらかは）へ返せと鳴動す、これによつて元の地へうつす〕

陽成院陵（やうぜいゐんのみさゝぎ）〔日本略紀云、天暦三年十月三日、陽成院（やうぜいゐん）太上皇を神楽岡（かぐらをか）の東の地に葬り奉る云々。帝陵記陵所知れずと云々〕

小督局家（こがうのつぼねのいへ）〔白川（しらかは）の流れ末にありしとなり。平家物語長門本に云、信西（しんせい）の女天下第一の美人なり、容色こまやかに芸も世に勝れて、白河（しらかは）の末小河（こがは）に住ければ小河殿とぞ申ける〕